

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第159集

三千束遺跡群

MICHIDUKA

市道遺跡IV

ICHIMICHI

長野県佐久市三塚

市道遺跡IV発掘調査報告書

2008.3

長野県佐久市

長野県佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第159集

三千束遺跡群

MICHIDUKA

市道遺跡Ⅳ

ICHIMICHI

長野県佐久市三塚

市道遺跡Ⅳ発掘調査報告書

2008.3

長野県佐久市

長野県佐久市教育委員会

例言

- 1 本書は、平成 18 年に調査した長野県佐久市三塚・跡部に所在する三千束遺跡群市道遺跡Ⅳの調査報告書である。

遺跡名 三千束遺跡群市道遺跡Ⅳ
所在地 長野県佐久市三塚 81-1,81-2,81-6、跡部 44-1,39-4,39-2
調査面積 126 m² (対象面積 6,860 m²)
開発主体者 長野県佐久市建設部都市計画課
開発事業名 国道 141 号線 4 車線化工事
調査期間 平成 18 年 10 月 27 日～平成 20 年 3 月 28 日

- 2 本調査は、佐久市の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。
- 3 調査は、羽毛田卓也を担当者とし、地元の皆様をはじめ多数の方の協力を得て実施した。
- 4 本遺跡に関わるすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
- 5 本書の執筆・編集は、羽毛田卓也が担当した。

凡例

- 1 遺跡の略称 IM Ⅳ
- 2 遺構の略称 住居址 → H
- 3 遺構・遺物の縮尺は各図中にスケールを付したので参照されたい。
- 4 本文・図版等の番号(例 7-3)は挿図番号(例第 7 図 3 番)と対応する。
- 5 ピット付近の(-)数値は、確認面から底面までの深度を表す。
- 6 遺構横断図中の記号「S」は「石」を表す。
- 7 土層説明中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財)日本色彩研究所色票監修 1987 年度版『新版標準土色帖』の表示に基づいた。
- 8 写真図版中の遺物の縮尺はその都度明記し、明記のないものは任意の縮尺である。
- 9 石器実測図中の矢印は砥石の使用方向を表す。
- 10 土層説明中の粒子表記は国際標準である「堆積物粒径分類」に基づいた。

名称	礫・パミス				砂			泥	
	巨礫	大礫	中礫	細礫	粗砂	中砂	細砂	シルト	粘土
直径 (mm)	256 以上	256～64	64～4	4～2	2～0.5	0.5～ 0.25	0.25～ 62/1000	62/1000～ 4/1000	4/1000 以下

目 次

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
1 調査に至る動機	1
2 調査の概要	4
3 調査の体制	4
4 調査日誌	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
1 遺跡の自然的環境	5
2 遺跡の歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の記録	7
1 層序	7
2 第1号竪穴住居址	7
3 第2号竪穴住居址	9
4 常光院塚	9
第Ⅳ章 調査のまとめ	10
写真図版	11

第 I 章 発掘調査の経緯

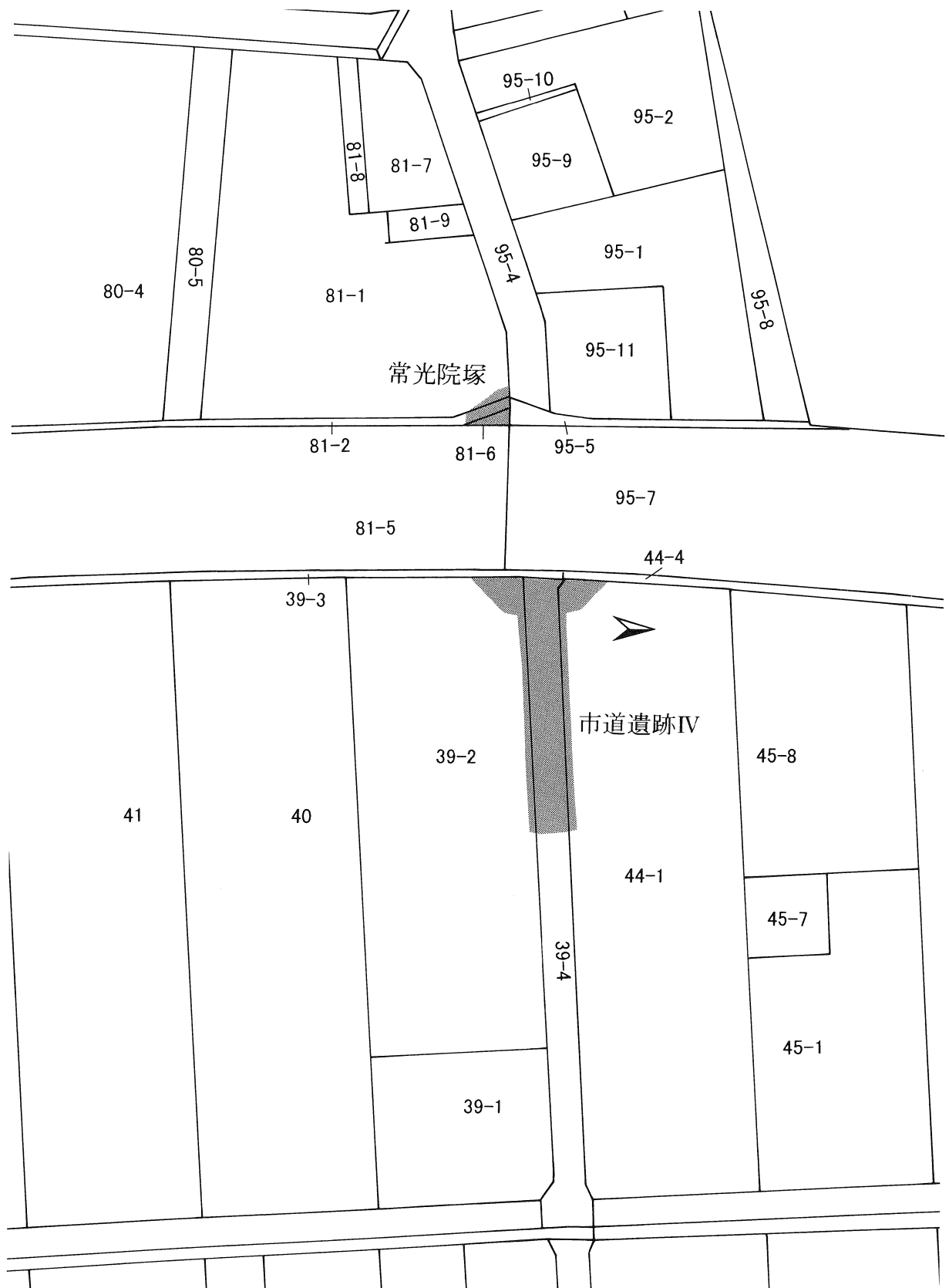
1 調査に至る動機

三千束遺跡群市道遺跡Ⅳは、佐久市三塚に所在し、佐久市中央部を北進する千曲川と片貝川により形成された帯状の微高地上（標高 668 m～670 m）に展開する古墳時代から平安時代の集落址である。今回の調査地点は、本遺跡群中央東端部に位置する。

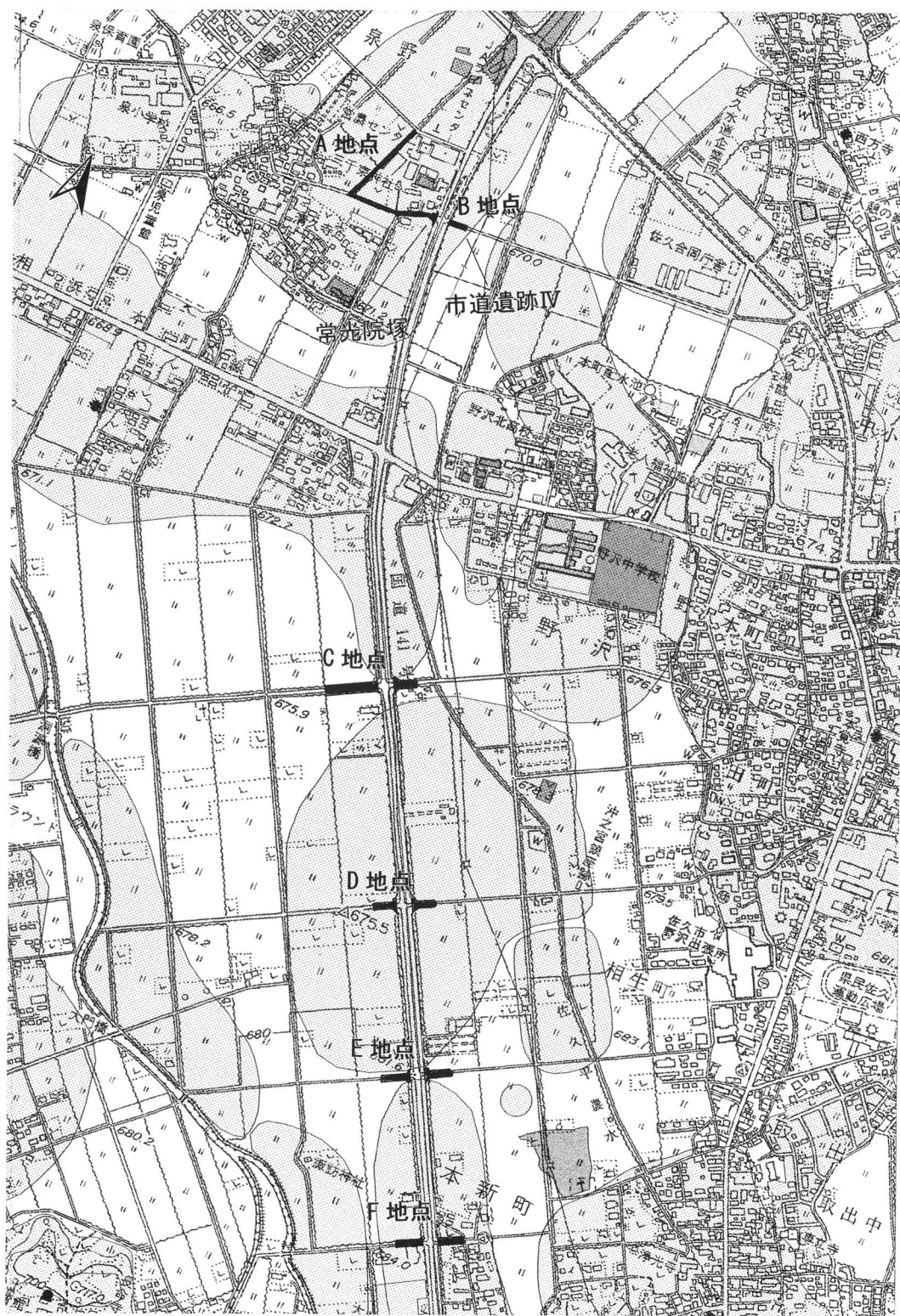
今回、佐久市都市計画課が行う「国道 141 号線 4 車線化工事」に伴い、佐久市都市計画課と佐久市教育委員会とで協議の結果、試掘調査を行い、遺構の有無を調査した。試掘調査の結果、古墳時代と考えられる遺構が検出されたため、再度協議を行った。協議により、遺構が検出された部分と常光院塚を、都市計画課より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査を行う運びとなった。



第 1 図 市道遺跡Ⅳ位置図 (1 : 50,000)



第2図 調査区周辺地籍図 (1 : 1,000)



第3図 国道141号線4車線化工事事業位置図 (1 : 10,000)

2 調査の概要

発掘調査

調査面積	126㎡
調査期間	平成18年10月27日から平成18年12月1日
整理調査	平成18年11月24日から平成20年3月31日
調査遺構	古墳時代の住居址 2軒
	古墳・奈良時代以降の小流路 1条
	古墳・奈良時代の遺物包含層 1箇所

3 調査の体制

事務局（平成18・19年度）	佐久市教育委員会 社会教育部 文化財課
教育長	三石昌彦 木内清（平成19年4月就任）
社会教育部長	柳沢義春
社会教育次長	山崎明敏
文化財課長	中山悟 森角吉晴（平成19年7月就任）
文化財調査係長	高柳正人 三石宗一（平成19年4月就任）
文化財調査係	林幸彦、須藤隆司、小林眞寿、羽毛田卓也、富沢一明 神津格、上原学、出澤力 並木節子（平成19年10月就任）
調査主任	佐々木宗昭、森泉かよ子
調査員	菊池喜重、澤井知春、清水澄生、日向昭次、中山清美、堀籠保子 山元有美子、狩野小百合、市川光吉、本田慶二、吉田信行、依田好行

4 調査日誌

平成18年4月11日～28日・10月30日

試掘調査

平成18年10月27日～11月10日

重機による表土剥ぎ開始

発掘器材の搬入

平成18年10月30日から12月1日

測量基準杭の設置

遺構検出作業、遺構の掘り下げ、遺構の実測・写真撮影

調査区の実測・写真撮影

平成 18 年 12 月 1 日

全調査区の調査終了

平成 18 年 11 月 24 日～平成 20 年 3 月 31 日

遺物の洗浄・注記・復元・実測・写真撮影

遺構実測図面の修正・遺構第 2 原図作成

各種図面のトレス、報告書版下作成

報告書編集作業、校正

遺物・図面の整理・収納

平成 18 年 12 月 4 日～平成 19 年 3 月 9 日

各地区の立会調査

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の自然的環境

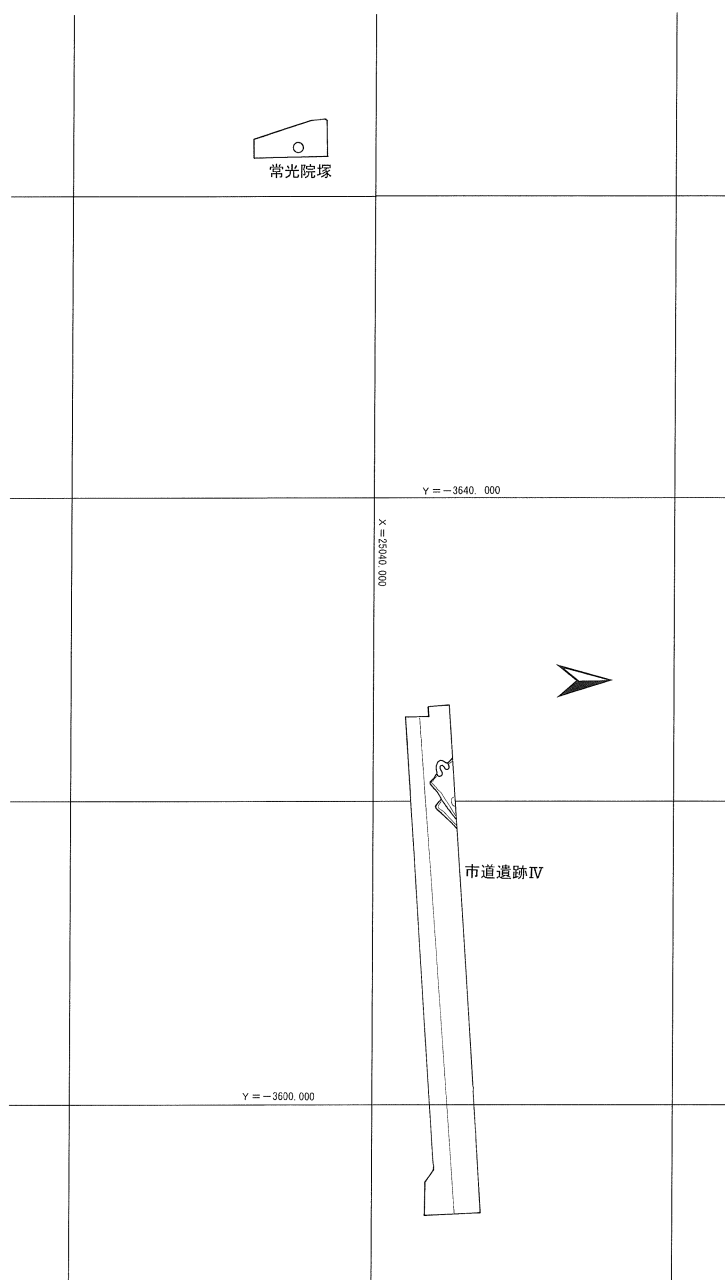
佐久平は、北方に前掛山 (2524 m)・黒斑山 (2404 m)・高峰山 (2106 m)・湯ノ丸山 (2101 m)・火山活動中の浅間山 (2568 m) を主とする三国山脈の南端峰群、東から南方に関東山地から連なる山々である平尾山 (1155 m)・森泉山 (1136 m)・八風山 (1315 m)・寄石山 (1334 m)・物見山 (1375 m)・凧の峰 (1292 m)・熊倉峰 (1234 m)・荒船山 (1422 m)・兜岩山 (1368 m)・霊仙峰 (1268 m) などからなる関東山地北西部の佐久山地北方峰群、西から南方に蓼科山 (2530 m)・双子山 (2223 m)・横岳 (2480 m)・茶臼山 (2384 m) を主とする北八ヶ岳連峰と、ほぼ四方を山々に囲まれた盆地で、長野県の中央東端に位置し、群馬県と接している。佐久平全域の平坦部の標高は約 600m から 1000m を測り、佐久市はこの佐久平のほぼ中央に位置し、平坦部の標高は 620m から 770m を測る。佐久市は北側で北佐久郡軽井沢町・御代田町、小諸市、東御市と、西側で北佐久郡立科町と、南側で茅野市、南佐久郡佐久穂町と、東側で群馬県甘楽郡下仁田町・南牧村と接している。平成 14 年度の年平均気温は 10.9℃、年間降水量は 994 mm、年間日照時間は 2069.9 時間、最高最低気温差は 46.4℃で、典型的な中央高地型気候となっている。

佐久市は中央部を佐久地方南端の甲武信ヶ岳に源を発する千曲川が北進し、浅間山麓に源を発する湯川・濁り川、佐久山地に源を発する霞川・香坂川・志賀川・滑津川 (24.1 km)・田子川・瀬早川・八重久保川・雨川・谷川、北八ヶ岳山麓に源を発する石突川・片貝川・大沢川・中沢川・小宮山川・倉沢川・宮川・滝川・大曲川・布施川・須釜川・八丁地川・鹿曲川・細小路川などの小河川がそれに向かって集まり、大小の扇状地や河岸段丘・侵食谷を形成している。

今回調査した市道遺跡は、東側を北進する千曲川支流の片貝川と千曲川に挟まれた形で緩やかに北に向かって傾斜している。調査地点は、片貝川により形成された帯状の小微高地上に展開しているものと推測される。調査区の地山となる基盤層は片貝川による河川堆積土と考えられる。

2 遺跡の歴史的環境

今回調査した三千東遺跡群市道遺跡Ⅳの所在する三塚・跡部地区には、弥生時代から中世にかけての遺跡が、千曲川やその支流である片貝川によって形成された河岸段丘状の微高地に展開している。本遺跡の含まれる三千東遺跡群内では、市道遺跡（昭和49年度）、市道遺跡Ⅱ（平成10年度）、市道遺跡（平成16年度）、宮添遺跡（平成11年度）、寺添遺跡（平成6年度）などが調査され、古墳時代～平安時代にかけての密度の高い集落が検出されている。跡部地区では、跡部儘田遺跡（平成11年度）、跡部町田遺跡（昭和51年度）、跡部町田遺跡Ⅱ（平成11年度）などが調査され、古墳時代～平安時代を主とする集落が検出されている。



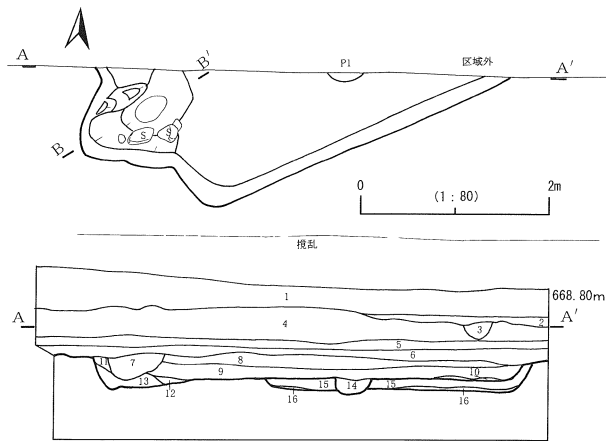
第4図 調査全体図 (1:500)

第Ⅲ章 調査の記録

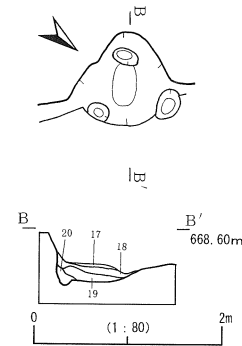
1 層序

遺構確認面までの土層は、6層（第5図参照）を確認した。第1層は現道アスファルト・碎石層の直下の層で旧耕作土・客土である。第2層は旧水田の床土、第3層は灰色シルト・粘質土である。第4層は旧水田の耕作土、第5層は旧水田の床土で、圃場整備前の水田と考えられる。第6層は砂粒を少量、中から小礫・炭化材微細片を微量含む黒褐色シルト（10YR3/1）で、古墳時代から奈良時代にかけての土器片を含む包含層である。本層は、水の影響下で成立した層と考えられ、不整合ではあるが、水中堆積層や、流水跡が見られる。また本層は、調査区東側で、流路状に窪むが、調査範囲が狭く、流路跡とは断定しがたく、奈良時代以降の洪水跡の可能性もある。地山は、おそらく片貝川の影響下で成立した層と考えられ、硬く締まった暗褐色シルト（10YR3/3～3/4）である。なお中砂を微量含むが、礫を含まない単独のシルト層である。

2 第1号竪穴住居址（H1号）



第5図 第1号住居址実測図



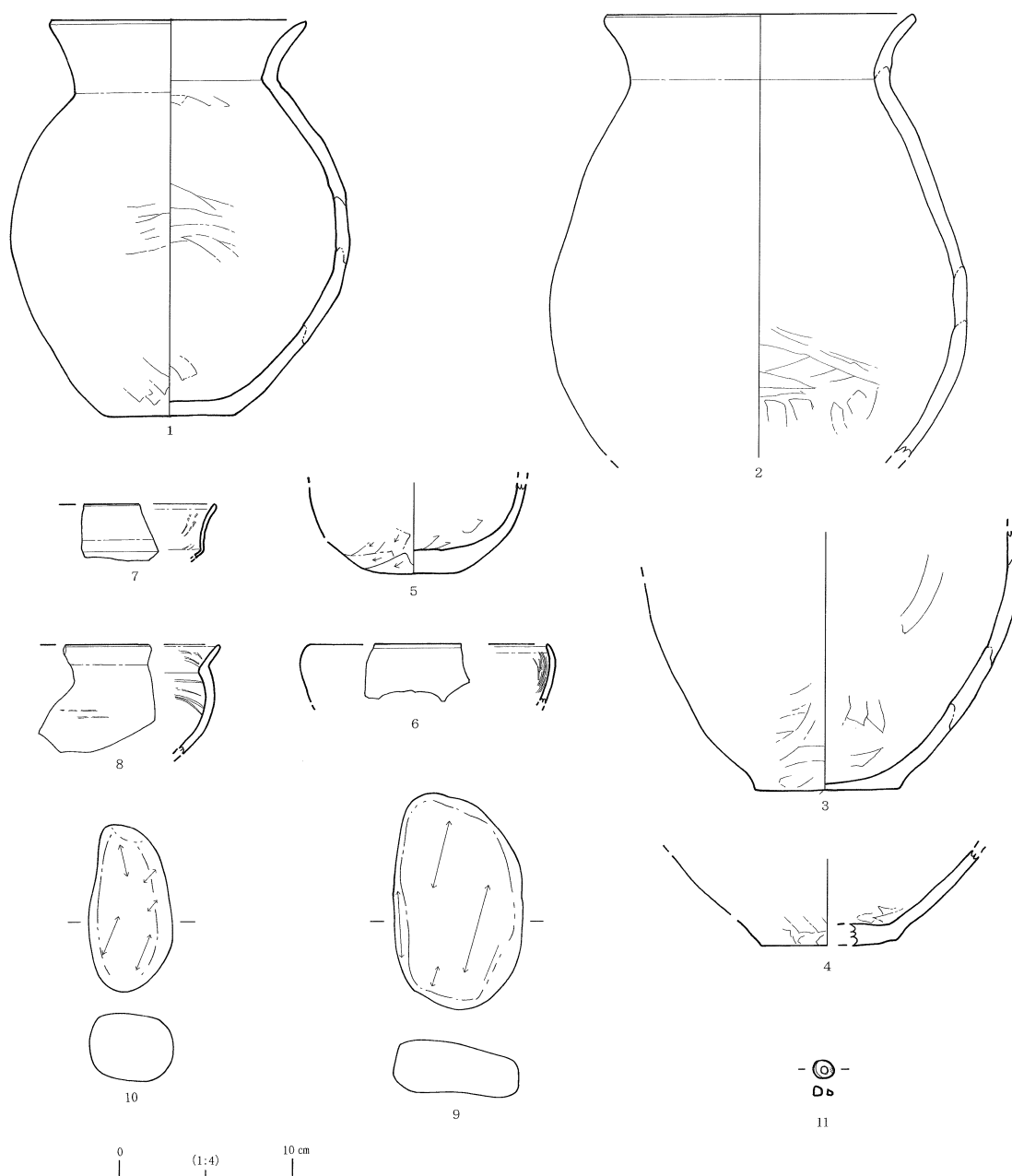
第6図 第1号住居址カマド掘方実測図

第1号竪穴住居址は調査区の西端で検出された。平面形態は方形と考えられるが、大半が調査区域外であり断定はできない。検出された東西長は354cm・南北長164cmで、壁の高さは28cm～20cm内外を測る。床面は著しく硬化しており、床面上部の一部に焼土を含む黒色炭化層が観察され、焼失か焼却されている可能性がある。貼床は確認されなかった。覆土は8層に分割された。図中第7層は中砂と炭化材微小片を微量含む黒褐色シルト（25Y3/1）で、他遺構のピットと考えられる。第8層は中砂を少量と炭化材微小片を微量含む暗褐色シルト（10YR3/3）、第9層は中砂と炭化材微小片を微量含む暗褐色シルト（10YR3/4）、第10層は暗赤褐色焼土を多量に含む黒褐色粘質土（75YR3/1）、第11層は焼土粒子を微量含む黒褐色シルト（75YR2/2）、第12層はシルトを少量と焼土粒子を微量に含む黒褐色粘質土（10YR2/2）、第13層はシルトと粘質土を少量含む暗赤褐色土（25YR2/4～3/4）である。第14層はピットの覆土で、粘質土とシルトを半々に含む黒色粘質シルト（10YR2/1）である。

ピットは1基のみ検出した。深さは30cm内外を測る。カマドは、西壁の南側で確認された。残存状況は

悪いが、両袖と火床部を確認した。煙道部から焚口まで 132 cm、両袖部分の幅 88 cm を測る。覆土は 4 層に分割された。第 17 層は熱を受け土器のように硬化した暗褐色粘土 (10R3/4) で、第 18 層はシルトを少量含む褐灰色粘土 (5YR4/1)、第 19 層は粘質土を少量含む黒褐色シルト (10YR3/2) 第 20 層は極めて硬く締まった黒褐色粘土 (10YR3/3) である。いずれもカマド構築土と考えられ、構築材は安山岩であった。

遺物は、甕 (第 7 図 1~4)、小型甕 (第 7 図 5) 坏 (第 7 図 6~8)、多目的石器 (第 7 図 9、10) などカマド左側と南側の壁を中心に出土した。1 の甕はほぼ完形で最大部を胴中央に持つ。胴部内外面ともにヘラナデが施され、口縁部はヨコナデである。2 の甕は最大部を胴下部に持ち、胴部内外面ともにヘラナデが、胴下部に不明瞭なヘラケズリが施され、口縁部はヨコナデである。3 の甕は内外面ともにヘラナデが施される。4 の甕は底部のみの出土で、内外面ともにヘラナデが施される。5 の小型甕は胴中央部以下の出土で、内外面にヘラナデが施され、底部外面にモミ状の圧痕が一箇所見られる。6 は内湾型の坏で、体部内

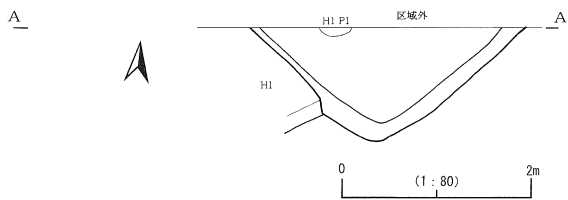


第 7 図 第 1 号住居址出土遺物実測図 (1~10 は 1/4、11 は 1/2)

面に縦方向のヘラミガキが施される。外面の調整は不明である。7は外稜型の坏で、体部外面がヨコナデ、内面にヘラミガキが施される。8は外斜口縁型の坏で内外面ともにヘラミガキが施される。9は輝石安山岩製の多目的石器（擦石・砥石）で、両端部を擦石として使用している。砥面は3面である。10は輝石安山岩製の多目的石器（擦石・砥石）で、両端を擦石として使用し、1面を砥石として使用している。11は滑石製の白玉でカマドより出土した。

以上より本住居址の所産期は古墳時代6世紀中葉と推定される。

3 第2号竪穴住居址（H2号）



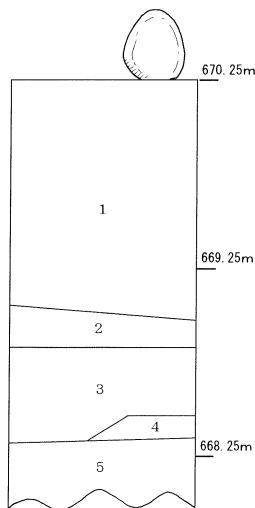
第8図 第2号住居址実測図

第2号住居址は、調査区西側で検出された。西側を第1号住居址により破壊される。検出された東西長は196 cm、南北長は176 cm、深さは40～16 cmを測る。覆土（第5図参照）は2層に分割された。第15層は粘質土を少量と炭化材微小片を微量含む黒褐色シルト（10YR3/2）、第16層は炭化材微小片を多量、シルトを少量含む極暗赤褐色粘質

土（25YR2/3）である。床面は著しく硬化していたが、貼床は確認されなかった。

遺物は甕の破片が少量出土した。本住居址の所産期は、6世紀前半と推定される。

4 常光院塚



第9図 常光院塚層序

常光院塚は、市道遺跡Ⅳの調査区から国道141号線を挟んだ西側の交差点角に所在する。以前付近には「砂塚」「石塚」が存在していたとされ、圃場整備事業により消滅したと伝えられている。その二つの塚と今回調査の「常光院塚」を合わせた三つの塚が、地名の三塚の根拠と伝承されている。「常光院塚」について付近で聞き取り調査を行った結果、「小さなお堂の故地」「尼さんの墓」「坊さんの供養塔」という結果を得た。現在地に所在する「常光院塚」は圃場整備の際に、道路用地にあたったため、塚の中央から西裾方向に移動したとされている。塚の本体は破壊されていると考えられたが、裾の一部が確認される可能性が考えられたため、今回調査を行った。調査は塚より移動させたとされる丸石の西側を中心に行った。

掘削と精査を行った結果、現地表面から190 cm掘下げた部分で地山層に到達し、塚の痕跡を確認することはできなかった。地山はこぶし大の礫を含む黒～暗褐色シルトで、地山までは4層を確認した。第1層はシルトと粘質土が攪拌された客土・盛土で、第2層は攪乱された旧畑作耕作土、第3層は旧畑作耕作土、第4層は畝の畝、あるいは土手と考えられる。遺物は、塚に関連する遺物は出土せず、客土部分を中心に現代の瓦・陶磁器片が出土した。よって塚から移動されたのは丸石のみと考えられる。現在丸石と石碑は、地権者の理解と協力が得られ、地権者の墓地に移動し、保存されている。

第Ⅳ章 調査のまとめ

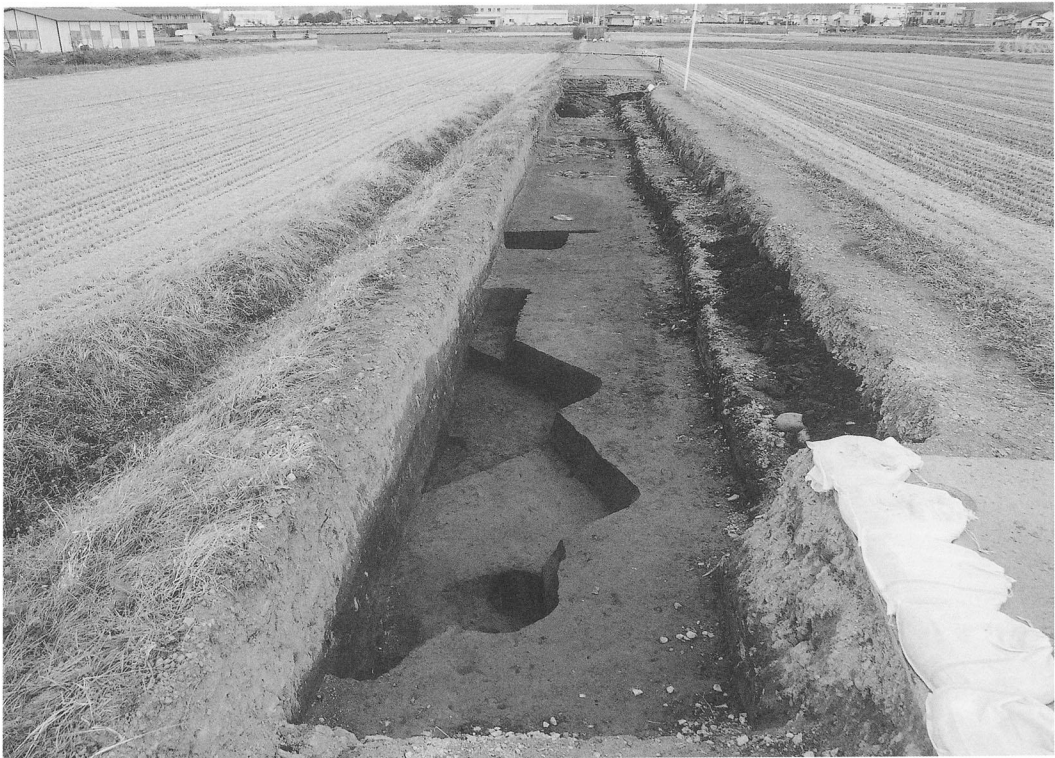
三千束遺跡群市道遺跡Ⅳの発掘調査では、古墳時代が所産期と推定される2軒の住居址と、古墳時代から奈良時代にかけての土器片を含有する黒色包含シルト・粘土質層とその直下から不整層を伴う流路跡を検出した。本遺跡は、市道（農道）下に残存していた遺構で、遺構が伸びるはずの北側は、圃場整備により削り取られていた。つまり現在の水田面床土より高い位置での遺構検出となった。この農道は、圃場整備の際には当時の水田面に客土しただけの構造であった。拡幅部の試掘調査では、遺構が検出されなかったが、土手法面に古い水田層が見られたため、あらためて現道部の試掘調査を行った結果、遺物包含層に到達したため、発掘調査をすることとなった。また、調査区の幅約3m中1mはガスの敷設により破壊されていた。ガス管は鉄製でかなり腐食しており、ガス漏れの危険性が考えられたため、調査終了と同時に管を取り替える工事が行われた。

第1号住居址のカマド構築土中からは、白玉が出土した。また第1号住居址・第2号住居址ともに床面に炭化材の小片が散乱し、床面は焼けて硬化しており、炭化物を含む焼土層に覆われていた。焼失や白玉の出土など、状態は昭和63年と平成元年に調査された長土呂の下聖端遺跡に極めて近く、所産期もほぼ同じである。下聖端遺跡で検出された古墳時代の住居址は、そのほとんどが時期に関係なく焼失していることから、焼失ばかりでなく、廃棄時の焼却の可能性があることがその報告書で論じられている。また各住居址からは白玉が多量に出土しており、特殊な集落ではなく、白玉が日用品であったことが伺える。床面よりまとまって出土したもの、カマド内、カマド構築土内、土器断面内、他時代遺構内より出土したものなど様々である。土器断面内のものは、焼成するものであるため、故意に封入したものとは考えられず、混入してしまったものと考えた方がよさそうであろう。またカマドに関しては、構築時に何らかの意味があつて封入されたものと考えた方がいいかもしれない。「火」に対する信仰、「火」を扱う場所としての「カマド」の信仰、長期間使用する「もの」に対する信仰（「タマイレ」様の信仰）などが考えられる。また構築時のそれらの信仰が仮にあったものとするれば、廃棄する際にも「タマヌキ」様の信仰があつたものと推定され、住居の焼却はその流れなのかもしれない。また6世紀中葉頃までの焼却住居は、カマドがほぼ完全な状態で残されている場合が多いが、7世紀前後からカマドは破壊されたように残存状況が悪くなる傾向があるが、該期の調査例の蓄積を待たねばまだ断定は避けたい。さらに下聖端遺跡との類似点に、遺物包含層がある。流水の作用によって成立した層で、特定の時代以前の遺物を含有するという点で共通点がある。下聖端遺跡では、奈良時代から平安時代前期の間に成立した層と推定しているが、市道遺跡Ⅳでは、平安時代前期の遺構を調査していないため、その前後関係までは不明であるが、包含する遺物は古墳時代から奈良時代のものである。下聖端遺跡では所在する台地全面を覆う洪水状の災害を推定しているが、この野沢地区においても、同時期に土砂を押し流すほどの洪水状の所作があつた可能性が考えられる。これについても今後の調査による蓄積を待ちたい。

最後に、調査に快く承諾をしてくださった地権者の皆様、常光院塚の調査と移転にご理解をいただいた地権者様、農業生活道路の通行止めと迂回に理解をいただき奔走していただいた跡部区長様そして三塚区の区長様、道路迂回についてご理解をいただいた三塚区民様、JA野沢支所様、JAさく南部営農センター様、JA佐久南部農機センター様、JAスマイルポート野沢SS様、佐久下水道組合様など、この場を借りて、ご協力とご理解をいただいたことに感謝申し上げます。



市道遺跡Ⅳ全景（東より）



市道遺跡Ⅳ全景（西より）



市道遺跡Ⅳ 第1号住居址（南より）



市道遺跡Ⅳ 第1号住居址（西より）



市道遺跡Ⅳ 第1号住居址カマド（東より）



市道遺跡Ⅳ 第1号住居址カマド掘方（東より）



市道遺跡Ⅳ 第2号住居址（東より）



市道遺跡Ⅳ 第2号住居址（西より）



市道遺跡Ⅳ 東側流路跡（西より）



市道遺跡Ⅳ 掘削状況（東より）



市道遺跡Ⅳ 遠景（南方より）



市道遺跡Ⅳ 埋め戻し状況（西より、中央ガス埋設管）



H 1 7-1 (1/3)



H 1 7-5 (1/3)



H 1 7-9・10 (1/3)



H 1 7-3 (1/3)



常光院塚 丸石と石碑



H 1 7-4 (1/3)



市道遺跡Ⅳ 道路復旧状況（東より）



常光院塚 近景（西より）



常光院塚 近景（北より）



常光院塚 石碑と丸石（南より）



常光院塚 近景（南より）



常光院塚 石碑と丸石の撤去状況（北より）



常光院塚 トレンチ掘削状況（北より）



常光院塚 トレンチ掘削状況（西より）



常光院塚 トレンチ掘削状況（北より）



常光院塚 トレンチ掘削状況（北西より）



常光院塚 調査前近景 (南より)



常光院塚 調査前近景 (北より)



常光院塚 調査区埋め戻し状況 (南より)



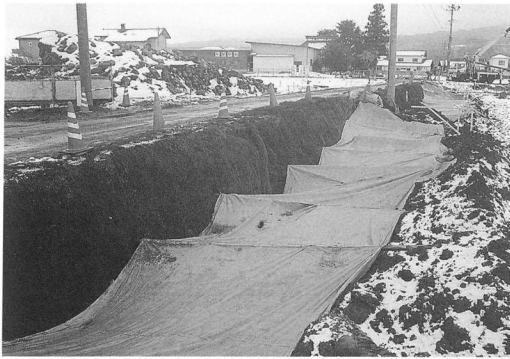
B地点試掘状況 (市道遺跡Ⅳ) 西方より



A 地点立会状況（北より）



A 地点立会試掘状況（北より）



A 地点立会状況（北より）



A 地点立会状況（南より）



C 地点西側立会状況（西より）



C 地点西側立会状況（東より）



D 地点西側立会状況（東より）



D 地点西側立会状況（東より）



D 地点東側立会状況（東より）



E 地点東側試掘状況（南より）



E 地点西側試掘状況（東より）



E 地点西側立会状況（西より）



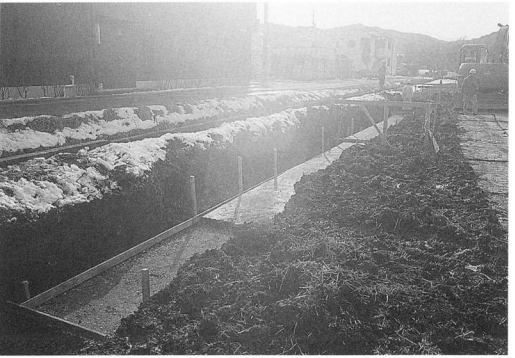
E 地点西側立会状況（東より）



E 地点西側立会状況（西より）



F 地点東側立会状況（東より）



F 地点西側立会状況（東より）

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第159集

三千束遺跡群 市道遺跡Ⅳ

2008年3月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込 3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀 5953
電話 0267-68-7321

印刷所 臼田活版株式会社

報告書抄録

書名	市道遺跡Ⅳ
ふりがな	いちみちいせき
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第159集
編著者名	羽毛田卓也
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2008.3.31
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	<small>ながのけん さくししが</small> 長野県佐久市志賀5953
遺跡名	<small>いちみち</small> 市道遺跡Ⅳ
遺跡所在地	長野県佐久市跡部 ^{あとべ} 44-1他
遺跡番号	佐久市—417
経度	
緯度	
調査期間	2006.10.27～2008.3.31
調査面積	126㎡
調査原因	道路改良
種別	集落址
主な時代	古墳時代
遺跡概要	遺構 竪穴住居址1軒、遺物包含層1箇所、流路跡1条 遺物 古墳時代の土器石器
特記事項	